

研究ノート

18-19 世紀のポーランド・ユダヤ人における アイデンティティの分裂 (1)

川 名 隆 史

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第5号 抜刷
2020年(令和2年)3月20日

研究ノート

18-19 世紀のポーランド・ユダヤ人における アイデンティティの分裂 (1)

川 名 隆 史

The Split of Jewish Identity in 18-19th Century Poland (1)

KAWANA, Takashi

Abstract

The split of identity in Polish Jewry began in the second half of the 18th century. Jewish people in the Polish-Lithuanian state, boasting the largest Jewish population in the world, enjoyed wide-ranging autonomy. But their political and economic status decayed along with the decline of the Polish state in the 18th century. Simultaneously, mystical-religious movements such as Frankism or Hasidism appeared and spread all over Poland. These new movements shook the order of the Jewish communities controlled by traditional, orthodox authorities, and cracked the national-religious identity of Polish Jewry.

This paper is an attempt to describe the process of this identity-splitting in the second half of 18th century Poland from the viewpoints of its ideology and movement. Afterwards, in the 19th century, a new sect of reformatory Judaism came into being under the influence of the Jewish enlightenment movement “Haskalah.” This new third trend of Judaism will be discussed in future editions of this journal.

Keywords: ポーランド, ユダヤ人, アイデンティティ, フランキズム, ハシディズム

目 次

- はじめに
- I. 神秘主義の広がりとはサバタイ・ツヴィの運動
 - II. ポーランド国家のユダヤ人社会
 - III. ポーランド国家における神秘主義的運動の展開
 - IV. フランキズムまたはサバタイズムの再現
 - V. ハシディズムの出現：ポーランド国家のユダヤ人社会の変貌
- おわりに

はじめに

厳密な意味で「ユダヤ人とは何か」という議論はさておいて、現代アメリカ社会におけるユダヤ人社会は、おおよそ保守派 (nurt konserwatywny)、改革派 (nurt reformowany)、正統派 (nurt ortodoksyjny)、ハシディズム諸派 (grupy chasydzkie)、超正統派 (haredim, ultra-ortodoksja) など、様々な集団、流派に分かれている。それぞれの流派は、それぞれの発生の経緯、歴史、伝統に基づく独自の政治意識を有しており、それがイスラエル社会にも反映し、世界のユダヤ人社会内部に縦横の亀裂を生んでもいる。

ここではひとまずアメリカを例に挙げたが、ユダヤ人社会が内部対立を起こしつつ、これほど多様化したことの原点を探て行くと、18世紀のポーランド王国・リトアニア大公国連合国家¹⁾ およびドイツ地域のユダヤ人社会に辿り着くことになる。²⁾ 近世ヨーロッパのユダヤ人社会は、15世紀末のイベリア半島のレコンキスタによるセファラディーム系ユダヤ人の拡散、16-17世紀のポーランド・リトアニア連合国家でのユダヤ人社会の繁栄、17世紀のサバタイ・ツヴィ (Sabataj Cwi) のメシア主義運動、18世紀からの啓蒙主義思想の影響などの要因が様々に関係し合って近代へと進んで行った。この過程の中で、現代の状況に直接影響を与えた思想的要因を探るならば、ひとつはメシア到来への期待を生むことになったユダヤ神秘主義と呼ばれる思想、もうひとつが近代化へと進歩しつつあったヨーロッパ社会の中で、それに適応して将来のユダヤ人社会のありかたを展望したユダヤ啓蒙いわゆるハスカーラー (haskala) の思想を挙げることができる。前者は主に、18世紀末の「ポーランド分割」以前のポーランド国家において発展し、最終的にはハシディズムの運動となってそれまでの支配的なユダイズムの制度を揺るがした。後者のユダヤ啓蒙の思想は、ドイツ地域で生まれ、やがて改革派の名で西ヨーロッパ地域、アメリカへと広がりを見せた。

本稿は、冒頭に挙げたユダヤ人社会の多様化の原点として挙げられる、このふたつの思想潮流を柱として、その発生、広がり、経緯を歴史的に跡付けることを目的とする。今回はそのうちの前半部分すなわち神秘主義的な傾向について論じる。³⁾ ユダヤ人社会は、19世紀末に至るとシオニズムや社会主義といった新たな状況に対応した新たな思想に直面して、更に複雑な展開を遂げて行く。しかし本稿では、それらが本格的に展開を始める以前の、18世紀から19世紀中葉という時期に限定して考察を進め、それ以後の問題については、今後の課題としておく。

1. 神秘主義の広がり と サバタイ・ツヴィの運動

ユダヤ神秘主義の代名詞ともいえるカバラ（kabala）の研究は、12世紀のドイツ地域で隆盛を迎え、その後研究の中心がイベリア半島に移る。15世紀末のレコンキスタに伴い、追放されたセファラディーム系ユダヤ人が東西ヨーロッパ、中東地域へと広く拡散し、それに連動してカバラ研究も、秘教的な性格を脱してその内容が広範に知れ渡ることになった。やがてガリラヤ地方が研究の新たな中心地となり、16世紀にルーリア（Luria Icchak ben Szlomo）によって、メシア主義的色彩の強い新たな教えとして体系化された。このルーリアのカバラが、オスマン帝国の中東地域からポーランド国家南東部にかけて広まり、その影響下に様々なメシア主義運動を生むこととなった。

この後、オスマン帝国領内はじめ各地のユダヤ人社会の中に、メシアを自称する様々な人間が現われ消えて行ったが、そのうちでも歴史上重要な位置を占め、その後の時代に大きな影響を残したのが、サバタイ・ツヴィである。1626年に現在のトルコのスマルナ（現イズミル）に生まれたツヴィは、ルーリアのカバラに心酔し、パレスティナ、エジプトで活動した後、1665年には預言者を自称していたガザのナタン（Natan z Gazy; Abraham Natan ben Elisza Chaim Aszkenazi）によってメシアであると宣伝され、本人もそう自覚した。ツヴィは拠点であったイェルサレムの共同体からは追放されたが、故郷のスマルナでは多くの支持者を得た。ツヴィは支持者とともにオスマン帝国の帝位を奪おうとイスタンブルに向かうが、イスタンブル上陸と同時に拘束された。ツヴィのメシア宣言は、ヨーロッパのユダヤ人社会に「東方にメシア現る」として知れ渡ったが、同時にツヴィが本当のメシアであるかという教義上の問題も生じた。このためポーランド国家のユダヤ人の全国組織である「四国会議」⁴⁾ から代表が送られ、ツヴィとの問答を通じてツヴィのメシアとして正当性が検討された。代表はツヴィをメシアとは認めず、それをオスマン帝国政府に報告した。その結果、ツヴィは処刑か、イスラムへの改宗かの選択を迫られた。ツヴィは1666年9月にイスラムに改宗し、アジズ・メフメット・エッフエンディ（Asis Mehmed Effendi）と名乗った。だが改宗後もツヴィはユダヤ人共同体との関係を維持していたため、改宗の真意に疑いがかけられ、1672年に逮捕されてアルバニア方面に追放され、数年後に死去した。⁵⁾

一見すると狂信的な宗教指導者が、政治的圧迫に屈して変節し改宗してしまうという、不名誉な歴史のエピソードと捉えられるような出来事ではある。しかしサバタイ・ツヴィの思想、行動を後世の歴史の展開のコンテクストの中で捉え返すと、ある別の顔が浮かび上がってくる。後述するフランキズム（frankizm）にも共通する問題であるが、「改宗」というものの意味が、ここでは強制される受動的なものではなく、むしろ救済に向かって積極的に行なうべきものとして設定されている。それはメシアによる救済を、トーラーに基づく伝統的なユダイズムの枠内で構想し待望するのではなく、その枠を脱し、より広範な宗教世界、具体的には同じ旧約聖書に基づくイスラムの中にもその可能性を見る志向である。イスラムへの改宗はイスラムへの帰依ではなく、それまでのユダイズムの狭隘さを克服して、メシア信仰のより高い位置に達するための秘儀であり、サバタイ・ツヴィはそれを改宗者にのみ伝えたとも言われている。その秘儀の内容、カバラ神秘主義におけるその秘儀の位置づけについてまで、ここでは言及出来ないが、この秘儀が様々な形でポーランド国家の、特に南東部に伝えられ、18世紀のユダヤ人社会に変動をもたらすことになったことは確かである。

II. ポーランド国家のユダヤ人社会

西部地域を除く現在のポーランド、および現在のウクライナ西部、ベラルーシ、リトアニアを含むかつてのポーランド国家の領域に、ユダヤ人は遅くとも12世紀には姿を現している。13世紀から14世紀にかけて、ポーランド国家が拡大するにつれてその居住領域は広がり、1264年のカリシュ特権⁶⁾を皮切りに、様々な特権に依拠して、その地位を固めていった。ユダヤ人社会にとって大きな転機となったのは、リトアニア大公国と合体して広大な国家領域を持つに到ったポーランド国家において、ユダヤ人は人頭税徴収を自主的に遂行する業務を請け負ったのを皮切りに、独自の裁判権を始め、様々な領域で自治的権能を強化し、歴史叙述においてユダヤ人自治と称された、他に類をみない広範な自治体制を作り上げたことである。人頭税徴収の調整機関として設置された全国組織四国会議Waadは、個々の共同体の代表から成る4つの広域的な議会の代表から成り、ユダヤ人の国会のような様相を呈した。そしてその国会で選ばれて設置される常設の執行機関は、あたかもユダヤ人の政府として、ポーランド国家の政府と密接に関係した。

この自治体制を制度的に運営していたのは、ディアスポラのユダヤ人社会に一般的に見られる、ラビンおよび有力な長老からなる指導機関であった。歴史的には長老会 (seniorat) が、トーラー、タルムードに関する知識に長け、人望に優れた師ラフ (rav) に拠り、その支援を得ながら共同体を運営していたが、やがてラフは共同体に雇われる有給の役人ラビン (rabin)⁷⁾ となり、共同体の宗教、行政全般の指導者として権威と権力を強めて行った。このようなユダヤ人社会のあり方は、通常 (定訳はないが) 「ラビ主義ユダイズム」 (Rabbinisches Judentum, judaizm rabiniczny, rabbinic judaism etc.) と表現され、18世紀まではディアスポラのユダヤ人社会の大半がこの体制のもとにあった。その後に出現した様々な流派、潮流と区別される中で、この制度の中のユダヤ人は「正統派」 (ortodoksja)⁸⁾ という名称で一般的に表現されることになる。

18世紀中葉以後、ポーランド国家のユダヤ人社会では、この伝統的な正統派による支配の正当性を揺るがすような大きなうねりが発生した。国際関係の悪化に伴い、ポーランド国家が17世紀から徐々に衰退し始めたのと連動するように、ユダヤ人社会でも同様に自治体制にほころびが見えてきた。この変化の要因のひとつは、国家による対ユダヤ人政策の変化である。ポーランド国家は衰退の一因でもある国家財政の悪化から、ユダヤ人への人頭税の増収を計ろうとし、これまでユダヤ人社会に一任していた徴税システムに介入してきた。ユダヤ人自治の根幹である制度に、国家が切り込んで来たことになる。国家の狙いは国制改革の一環としてユダヤ人からの税収増にあったが、その政策はそれを超えて、ユダヤ人に限らず国内にいるあらゆる民族的少数派を改革し近代化する、すなわちかれらを国家の中でどのように位置づけるかという問題に直面する。ポーランド人のいわゆる「国民国家」に、内部の民族的少数派をいかに取り込むか、言い換えればかれらをいかにして「国民」にするかという問題が生じていたのである。特権の下で伝統的に支配的地位を確保していた、いわゆる正統派の指導者層は、国家の政策の変化を十分に理解できず、有効な対応策を見出せなかった。かれらはむしろ近代化しようとしているポーランド国家の中で、旧来の特権を維持しようとする道を探ろうとした。

しかしこの正統派指導層の支配的地位は、ユダヤ人社会内部に生じた要因によって脅かされていた。16-17世紀には、潤沢な資金で金融業や様々な請負業 (arendă) を営み繁栄していたユダヤ人社会には、有力なキリスト教徒の側 (貴族、教会、修道院など) からも投資がなされていた。しかし継続する戦争や国内の混乱などのため、また正統派指導層の専横で有害な財政運営のため、

徐々にユダヤ人共同体の財政が悪化した。人頭税の滞納、債務の増加などによって破産状態に陥ったため、指導層はそれを貧しい層への課税強化によって乗り切ろうとしたが手遅れであった。ユダヤ人社会内部で裕福な指導層と貧困化する一般住民との間の亀裂は深まり、一般住民の指導層への不信感は増した。人頭税徴収が国家の側に掌握されたことで四国会議を頂点とするユダヤ人自治は1764年に解体されたが、宗教的権威に基づき正統派が指導層を形成する、ユダヤ人社会内部の階層構造は温存されたままであった。

III. ポーランド国家における神秘主義的運動の展開

このような変動期にあった、18世紀中葉のポーランド国家のユダヤ人社会の中で、神秘主義的要素を帯びたふたつの運動が発生し、やがて国内のユダヤ人社会を事実上分裂させる事態に到らしめた。17世紀半ばにウクライナ地方で発生したフミェルニツキ率いるコサックの対ポーランド反乱は、ユダヤ人にも攻撃を加えた。ウクライナ地方のユダヤ人の多くが殺され、あるいは逃亡を余儀なくされた。この知らせはポーランド国家を越えてヨーロッパ全域、更にその他の世界にも伝わり、ユダヤ人に強い厭世の気分、またメシアの到来による救済への願望の気運が生じた。まさにそのような時期にサバタイ・ツヴィが現れたため、かれの行動はより一層の現実味を持って、多くのユダヤ人に受け入れられたのである。

サバタイ・ツヴィはイスラムへの改宗後、数年して死去したが、かれの思想はサバタイズムとして生き残った。サバタイ・ツヴィの死後、支持者サバタイストは、おおよそ2派に分かれた。穏健派は救済がユダイズムの中で満たされるのを待望し、現実においては伝統的な正統派の体制の中に落ち着いた。一方、急進派はメシアとしてサバタイ・ツヴィを信奉し、ユダイズムを捨てることでその秘儀に預かることが出来ると信じた。かれらは、「モーセの律法に基づく制度を、悪魔的な力でイスラエル（すなわちユダヤ人）に与えられたもの」と断じ、神の啓示は「旧約聖書に依拠するあらゆる宗教（すなわちイスラム、キリスト教にも）に隠されているとした」。こうしてかれらには改宗への垣根は取り払われ、ユダヤ教の可能な道としてイスラムやキリスト教への改宗の道が開かれたと言える。この思想、方針が純粋に理論的に編み出されたものか、あるいは正統派による支配に対抗する現実政治的な意図によるものなのかは定かではない。ただその影響を受け、支持者となった層に、現実政治的な思惑があったことは否めないであろう。

サバタイズムの思想は、フミェルニツキの反乱で壊滅的な被害を受け、閉塞感とメシア待望感に浸っていたポーランド国家の南東部、特にポドレ（Podole）地方のユダヤ人社会に少なからぬインパクトを与え、多くの支持者を獲得した。こうして形成された土壌の上に、新たな神秘主義的要素を備えた二つの運動が発生した。フランキズムとハシディズムである。

IV. フランキズムまたはサバタイズムの再現

ポーランド国家の南東部ポドレ地方を中心に、所々でサバタイストが活動していた。かれらは巡回説教師として村や町を回って、時には拠点を築いて支持者を集めていた。中にはメシアを自称する者もいたが、すぐに偽メシアとして追放された。こうしてサバタイズムの新たな担い手（場合によってはメシア）が待ち望まれていた。そこに強烈な個性を持ったヤクブ・フランク（Jakub Lejbowicz Frank）という人物が、新たなメシアとして現れたのである。ポーランド国家南東部のポドレ地方は、オスマン帝国と国境を接し、17世紀には断続的にポーランド国家とオスマン帝国

の間で戦争が起きていた。オスマン帝国は一時的に戦争に勝ってポドレ地方を手に入れたとき、当地のユダヤ人をイスタンブルやエディルネに移住させた。アシュケナジームのポドレ地方出身のユダヤ人は、オスマン帝国でセファラディーム・ユダヤ人と接触し、かれらの間に広まっていたカバラー研究に触れ、一定の影響を受けた。戦況の変化でポドレ地方に帰還したユダヤ人は、セファラディーム文化の要素、特にカバラーの神秘主義を持ち帰った。ポーランド国家のユダヤ人社会が基本的にアシュケナジームから成り、正統派指導層による支配構造が一般的であったのに対し、南東部のポドレ地方は、このような事情からユダヤ人社会の性格も他の地域とは異なり、国家権力を後ろ盾とする正統派の支配もそれほど強力ではなく、気運としてカバラー神秘主義を受け入れるに適した土壌となっていた。

1726年にポドレ地方のコロルフカという村に生まれたヤクブ・フランクは、父がサバタイストとして訴えられたため、生後まもなくブコヴィナ、モルダヴィアを経てオスマン帝国領内に移った。成人してスミルナでカバラーを学び、当地のサバタイストの娘と結婚した後、サロニカに移って自身の学校を開いた。このようにフランクは一貫してサバタイズムの環境で育ち、サロニカ時代にすでに自身をメシアと自覚するようになっていたようである。それがポドレ地方にも伝わり、1755年にポドレ地方からサバタイ派の使者が現れメシアとしての伝導を促されて、12月にフランクはポーランド国家に移動した。年が明けて間もなく、ランツコルニという町で支持者と遭遇し、密儀の集会(=宴会)を開いた。ドアも窓も閉ざした部屋で集会を開き、全裸で歌い踊って陶酔状態に、そしてある種の性的放縦に到るという儀式であり、かれらはこれを宗教的熱情の条件としていた。だがこの集会が非倫理的だとされて、フランクは支持者ともども正統派により逮捕された。フランク自身は、オスマン帝国臣民ということでオスマン帝国へ追放された。フランクはその後まもなくイスラムに改宗し、オスマン帝国からポドレ地方と接するホチム地方に所領を得た。フランク自身は国外に逃れたが、かれの支持者は国内での活動を活発化させていた。

ランツコルニの事件を契機に、正統派指導層はサバタイストすなわちフランク支持者(フランクキスト)に対して行動を起こし、1756年6月13日にサタヌフのラビン法廷は、サバタイ・ツヴィを信奉するすべての者に破門(klatwa)を宣告した。ユダヤ人自治の中心機関である四国会議がこの裁定を有効と承認し、ポドレ地方全体のユダヤ人共同体に回状を發して、異端サバタイズムの信仰を抱く者をすべて投獄するよう求めた。ユダヤ人社会内のこの動きは、ポドレ地方の中心都市カミエニェツ・ポドルスキの司教デンボフスキ(Mikołaj Dembowski)の関心を引いた。ユダヤ人の正統派指導層は、サバタイストすなわちフランクキスト⁹⁾の思想、行状がユダヤ人社会にとってのみならず、キリスト教徒にとっても極めて有害であるため、キリスト教会自体が懲罰すべきであると訴えた。ユダヤ人がキリスト教会に訴えを出すことは異例である。一方のサバタイ派の側は、自分たちはタルムードに反対する者であり、古代以来の文献研究、カバラー研究を通じて独自に三位一体の教義に達したのであり、ユダヤ人正統派は、サバタイ派の教義がキリスト教の教義と似通っているが故にサバタイ派を弾圧しようとしているのだと主張した。教義上、サバタイ派とカトリック教会の間に、もはやほとんど違いは見出せない。司教側はユダヤ人の双方に、教会裁判所の場での公開問答で決着をつけるよう命じ、1757年7月にカミエニェツ・ポドルスキでサバタイ派の代表19名と正統派ラビン40名が参加して実施された。フランク自身は国外にいたため、この公開問答にどのように関わったかは不明である。

9月17日に教会裁判所の裁定が出された。サバタイ派の側が上記のような主張をする限り、サバタイ派に有利に決着することは目に見えていた。教会裁判所は、サバタイ派の主張を認めてタルムード文書の焼却を命じ、司教が出したサバタイ派への保護状を有効として、在地の支配者であ

る貴族に要請した。公開問答はサバタイ派の勝利に終わったが、後ろ盾のデンボフスキがその後まもなく死去したため、正統派によるサバタイ派への攻撃が再開された。苦境に立ったサバタイ派は、翌年夏、ルヴフの教会裁判所に、再度公開問答の開催を請願した。今度は自分たちは洗礼を受ける用意があるが、その前に再度正統派との間で、教義上の決着をつけたいという意向であった。1759年7月～9月に公開問答は実施されたが、今度は教会側は教義論争そのものにはほとんど関心を持たず、むしろサバタイ派の洗礼を進めることに意義を見ていた。裁判所は基本的にサバタイ派のほとんどの主張を正当と認めた。¹⁰⁾ フランクは前年1758年の半ばに、ポーランド国王アウグスト三世から通行許可を得てポーランド国家領内に入っていたが、このルヴフの公開問答に直接関わった形跡はない。サバタイ派は予告された通り、続々とキリスト教へ改宗し、ルヴフ、ルブリン、ワルシャワで総勢3,000人が改宗したとされる。改宗したサバタイ派はポーランド国家の法に基づいて、貴族身分に迎えられた。フランク自身もルヴフで洗礼を受けて、洗礼名ユゼフを得た。そして続いて首都ワルシャワで二度目の洗礼を受けた。その時の名親は知事のプラトコフスキ、国王アウグスト三世の名代であった。この間のフランクとカトリック教会、そして国王つまりポーランド国家の間にもどのような関係があったか、そしてそれがどのような意味を持っていたのかを解くことはここでは出来ない。この時期のユダヤ人の問題が、かくも不可思議な現象を引き起こしていたことを指摘するに留めたい。

サバタイストおよびフランキスト、そして何よりもフランク自身が、ここから数奇の運命を辿った。フランクの不可解な行動は支持者からも不審の目で見られたようで、洗礼の数ヶ月後に密告によって逮捕された。ワルシャワの教会裁判でフランクは、チェンストホーヴァのヤスナ・ゲーラ修道院へ無期限の幽閉の判決を受けて、収容された。幽閉は13年間続くが、まさにその間にフランクは自らの救世主としての教義を完成させ、ヤスナ・ゲーラ修道院に安置されているマリア像 (obraz Matki Boskiej Częstochowskiej) に封じ込められている神の栄光を解放することが、メシアとしての自らの使命であるとした。ポーランド国家のシンボルとして信仰の対象となったヤスナ・ゲーラ修道院のマリア像¹¹⁾ に、このような意味を与えたことは、フランクの思想において、すでにユダヤ人の救済という使命を越えて、ポーランド国家つまり現世の救済という思考様式が出来上がってきていることが見て取れる。政治的には自らを未来のポーランド国王に擬したとも考えられる。これはフランクが後に支持者を軍隊的に組織し、軍事訓練を続けていたこととも符合する。

フランクは1773年に、当時ヤスナ・ゲーラ修道院を拠点としたバール連盟軍をロシア軍が駆逐したことで、13年ぶりに解放された。しかしロシア軍による解放は法的には無効で、ポーランド国家の国法においては無期限幽閉とした教会裁判の判決は有効であった。このためフランクはオーストリア皇帝マリア・テレジアの庇護を受けて、モラヴィアのブルノに移った。だがマリア・テレジアの死後、次の皇帝ヨーゼフ2世からは嫌われ、オーストリア領内からの退去を求められた。1786年にフランクは、フランクフルト (Frankfurt am Main) の近郊のオフエンバハ (Offenbach) へ移り、然る貴族から館を借り受け、新たな拠点とした。定住400名の支持者を抱えたフランクは、1791年に死去するまでこの地で軍事教練とカバラー研究に勤しんだという。教団は3人の子が引き継いだが、1800年と予定されたメシアの出現が起きず、借金がかさんで財政的に苦しくなるうちに徐々に支持者は去り、娘のエヴァが1816年に死去したことで、ほぼ教団は存在をやめた。

サバタイ・ツヴィと同様に、フランクの活動の経過は荒唐無稽といった印象である。しかしながら一見すると無節操に見える改宗の繰り返しや、ほとんどキリスト教と見まがうばかりの教義

などには、独特の解放観すなわち救済の可能性を示す指針が読み取れないでもない。サバタイ・ツヴィの運動がオスマン帝国領内に限定され、ポーランド国家にはその意義だけが伝えられたのに対し、フランクは実際に世界最大のユダヤ人集積地であるポーランド国家に姿を現わして強烈な印象を与えたことで、国内のユダヤ人社会のみならず、ポーランド国家およびカトリック教会の関心を引いた。すなわちユダヤ人社会とキリスト教社会の双方に、当時の時代に要請されていた歴史的課題の存在を浮かび上がらせたのではないかと推測できる。もちろんフランクが意識的にそれを示したわけではない。しかしユダヤ、イスラム、キリスト教の相違を越えて、いずれの立場においてもメシアの到来は可能とするような議論は、宗派の違いを超えた救済の道を提示したとも言える。¹²⁾ 個々の世俗の宗教の狭隘性を越えて、大げさではあるが普遍的救済（すなわち人間の解放）へ向かう道筋を示したと言えようか。そこには宗教を相対化する啓蒙主義との近縁性を、またそれをユダヤ教的コンテクストに限定すれば、ほぼ同時代に生きてユダヤ啓蒙ハスカーラーの思想を展開させたモーゼス・メンデルスゾーン（Moses Mendelssohn）との近縁性も見出すことが出来るかも知れない。¹³⁾ フランクの名はオッフエンバハ時代、そしてその死後もドイツ地域の啓蒙主義的知識人の関心を引き続けた。¹⁴⁾

V. ハシディズムの出現：ポーランド国家のユダヤ人社会の変貌

サバタイズムの影響が色濃く残り、それをフランクが増幅させたポーランド国家の南東部のポドレ地方で、18世紀半ばから、同じ神秘主義的傾向を持つが、メシア待望論とは一線を画す新たな運動が生まれ、急速に成長していた。ハシディズム（chasydyzm, Chassidismus, hasidism）である。サバタイズムやフランキズムは改宗を制度化し、それを救済の条件とすることで、実質上ユダイズムの彼岸に理想を構築した。それに対しハシディズムは、既存のユダイズムの制度は所与のものとして認め、その中に新たな教えの道を探ろうとした。すでに述べたように、ポーランド国家の南東部では、フミエルニツキの反乱のあった17世紀半ばから、カバラーに基づく神秘主義の思想が広まっていた。奇跡を起こすと称する者や、メシアを自称する者などが国中を徘徊し、程度の違いはあれ様々な神秘主義の言辞を振りまいていた。サバタイズムやフランキズムはそのような気運の中で、メシア主義的色彩の強い部分を刺激して、多くの支持者を得た。そのメシア主義は、単にメシア到来を待ち望むのではなく、カバラー研究を深め精神的禁欲の中でより高い次元の認識領域に到達しようとする、知的あるいは理論的な意志に基づいていた。したがってフランキズムに惹かれたのは、ユダヤ人社会の中の比較的知的で豊かな人たちであったと言える。これに対しハシディズムはむしろ、民衆の言葉で様々な教えを伝える遍歴する説教師のようなレベルでの教えとして、幅広い層に広まりを見せる。ハシディズムは、カバラーの様々な要素、テーゼを理論的ではなく、生活実践の中で実現しようとした。いわゆる理論的カバラーの高尚な意志の意義を、個人的あるいは共同体での生活の中に調和的に深化させようとしたと言える。ハシディズムでは、宗教的实践は礼拝と日常の生活行動において実行され、それは目的意識から導かれる緊張した意志ではなく、深い本質的存在に根差す感覚的生命の中に浮かび上がる意志から発した時に、意味と祝福を受けるものとされた。神は、苦悩や禁欲を経てではなく、賢明で喜ばしい生活の享受を通して賛美されるとされた。喜ばしき陶醉、狂喜の状態へと導くエクスタティックな礼拝こそが神との合体へ導くのであり、歌と踊りによる神の賛美、あるいは神秘的瞑想が特に重要な意味を持つ。ハシディズムは、発生後まもなく様々な集団に分化し、それぞれが指導者であるツァディク（cadyk）¹⁵⁾の下に結束し、独自の教団として発展して行った。当然、

その教えも指導者ツァディクの個性によってニュアンスを変えて行くが、基本的にはおおよそ上述のような要素を共通なものとしていた。

ハシディズム運動の発生のプロセスに関しては幾つかの説があるが、一般的にはその創始者としてバアル・シュム・トヴ (Izrael ben Eliezer Baal Szem Tow: 通称ベシュト BeSzT) の名が最も知られている。1700年頃にポドレ地方に生まれたベシュトは、当時ポドレ地方に蔓延していた様々な神秘主義的運動のうち、禁欲主義的傾向に対抗する、恍惚の陶醉を重視するグループの指導者として名をはせた。ベシュトのもとには信奉者が集まり、その思想はポドレ地方からポーランド国家の各地域へと広がった。ポーランドのハシディズムの思想と運動のすべてがベシュト個人に集約されるわけではないが、その権威は確かに確立されており、後にハシディズム運動が指導者の家系に分化して行く際に、ベシュトの子孫の家系の権威は維持された。

ハシディズムがポーランド国家の全域に拡大した1760～70年代は、ポーランド国家が存亡をかけて改革を進めつつも、1772年に第一次分割に直面した時代である。ポーランド国家のユダヤ人共同体自体も財政難から衰退過程にあった。ユダヤ教育機関イエシヴァも往時の権威を失い、タルムード教育の水準も低下し、有能なラビンはより良い条件を求めて西欧に流出した。正統派の権威を象徴するイエシヴァの衰退は、そのまま正統派指導層による支配の構造に影を落とす。さらに1764年に四国会議が解体されて、ユダヤ人自治の実質的な基礎が失われ、更には第一次分割によって国土のかなりの部分が、ポーランド国家から各分割国による統治へと移行した。各分割国の、新たに統治対象になったユダヤ人に対する政策はすぐには整わず、ほとんど旧来のままであったとはいえ、統治者の変更はある空白の時間を生んだと言える。ハシディズムにとっては、この状況は好都合と言えた。ユダヤ人が政治的に解放されない限り、ユダヤ人は統治者の下で許された法的枠組の中で生きるしかない。ひとつの町にはひとつの共同体、ひとつのシナゴーク、墓地が原則であり、ハシドが多数となっても、ハシド独自の共同体を作ることは許されない。当然、共同体の指導権をめぐる争いが激化する。ハシドは、それまで正統派が独占してきた長老会、ラビンのポストを要求するようになる。

サバタイズムやフランキズムと異なり、ハシディズムはタルムードの権威を否定しない。したがってタルムードに立脚する正統派の支配構造を否定することはなく、伝統的な共同体の中に正式の、同等のメンバーとしてハシドの位置を確保すればよいのである。ハシディズム指導者のツァディクがラビンのポストに就くかどうかは、あるいはラビンの地位に就かずとも、共同体内でツァディクと正統派のラビンという二つの権威が調和的に機能しうるかは、それぞれの共同体の事情によって左右される。

やがてツァディクはディナスティア (dynastia, Dynastie, hasidic dynasty) という名の宗家、一門を形成するようになる。ツァディクの地位は世襲となり、ツァディクの邸宅は信者の聖域となる。ユダヤ人共同体が国家によって管理されている間は、通常複数のシナゴークは持てないが、ハシドは多くのところで自前の礼拝施設 (自宅の場合もある) や学校を持つようになっていた。このようなハシディズムの拡大、強化に対し、正統派の抵抗が起きる。18世紀末に始まる両者の抗争は、徐々に激しさを増した。当初は共同体内部で平和的に機能していたツァディクと、正統派ラビンも対立を始めた。ハシディズムが優勢な南部地方では、ハシディズムが共同体を掌握、あるいは優勢なもとで正統派と共存することが出来た。ハシディズムに対して最も非妥協的に敵対したのは、リトアニア大公国の正統派であった。リトアニア大公国のユダヤ人共同体は、高名なヴィルノのガオン (Gaon z Wilna - Elijah ben Szlomo Zalman) を頂点に、理論的にもまた実質的にも強力な正統派支配の構造を有しており、当初はハシディズムの入り込む余地は無いと思わ

れていた。しかし1770年代にはハシディズムの影響はリトアニア大公国にも及び始めた。それが発覚すると同時に正統派指導層は即座に反応し、1772年春にハシドへの破門、体刑、追放令が相次ぎ、ハシディズム文書の焼却が命じられた。1781年にリトアニアのラビン会議は、ハシディズム追放の1772年の決定を再認し、ポーランド国家全体の共同体に向けてハシディズム排除を呼びかけた。当然のことながら、ハシドの側も相応の反撃を開始し、両派の抗争が続いた。第3次分割によって、リトアニア大公国の大部分とポドレ地方、ウクライナ地方の大部分がロシア領となった。ポーランド国家が滅亡した後も、正統派とハシドの争いは継続し、両者ともがロシア当局に訴えを出し、また買収合戦を繰り返した。結果的にはロシア当局はこの訴訟合戦からは手を引いてしまい、最後はロシア政府が1804年に、ハシドを独自の信仰集団と認め、自身の指導者つまりラビンを選出する権利を認めたことにより、法的地位の面での争いは終結した。¹⁶⁾ これにより、正統派とハシディズムは法的に同等となり、敵対しながらも共存する体制が出来上がった。すなわち基本的には相容れない二つのユダイズムが並立することになったのである。

おわりに

このような一連の動きの結果、分割前のポーランド国家のユダヤ人社会は概ね、正統派とハシディズムに分かれ、それぞれが独自のユダヤ・アイデンティティを有して共存することとなった。16世紀のルリアのカバラー神秘主義に影響されて起こったサバタイ・ツヴィのメシア運動や、その再現とも言えるフランクの運動は、改宗を救済の条件としたことであたかもユダイズムに離反したように見えるが、他の宗派を受け入れてもそこにユダヤ人としての可能性を見出す、まったく新たな思考の枠組みを提供したものとも考えられる。ハシディズムは、サバタイズムやフランキズムと同じような地域、精神的環境の中で同じ神秘主義の要素を中心に据えながらも、政治的には伝統的な正統派支配の構造を認めつつ、独自の救済あるいは精神的解放の道筋を示し、強力な勢力を築き上げた。

分割前のポーランド国家のユダヤ人社会が、抗争の果てに正統派とハシディズムに色分けされたのと時を同じくして、第三のユダイズムが発生する。ユダヤ啓蒙として知られるハスカーラーの影響の拡大である。周囲のキリスト教社会に文化的に同化することにより、新たな時代に適應することの意義を強調するハスカーラーの方向は、生存の型式全体を包み込むユダヤ教の意味を大きく変えることになる。ユダヤ人が、キリスト教社会の中の異質な民であることを止め、ユダヤ教を維持しつつ国家の同等の一員として、一市民として新たなアイデンティティを持つことを志向したのである。宗教の意味を相対化して、周囲の社会へ同化するという概念は多様な意味を持ちうる。場合によってはフランキズムの思想と重なり合うことも考えられる。後に「改革派」の名で新たなユダイズムの世界を生み出したこの思想運動は、18世紀末にドイツ地域の啓蒙主義知識人によって喧伝され、ポーランド地域に広まるとともに、西ヨーロッパ、アメリカにも広まって行く。かつてのポーランド国家領域に関しては、ポーランド分割によって政治的条件が激変し、また各地域の社会、経済の変化によって、各国のユダヤ人社会で激しい階層分化が生じ、それがユダヤ人アイデンティティの変遷に影響を及ぼすことになる。ポーランド分割後の歴史、改革派の進展については、稿を改めることとする。

付 記

本稿は、2017-2019年度科学研究費補助金（基盤研究C「レリギオとレギオの狭間：セファラディーム・アシュケナジーム・ミズラヒーム」）の成果の一部である。

注

- 1) 18世紀末のポーランド分割まで存続したポーランド王国とリトアニア大公国の連合国家（Rzeczpospolita）。表記上の煩雑さを避けるため、特にリトアニア大公国を強調する必要がある場合を除いて、本稿では以後この国家を便宜上「ポーランド国家」と表記する。また本文中で、人名その他の用語に原語を追記する場合には、ポーランド語で表記することを原則とする（基本的には *Polski słownik judaistyczny* の表記に準じた）。それは大部分の対象がポーランド国家のユダヤ人に関わることであり、またヘブライ語のトランスクリプションにおける混乱を避けるためである。
- 2) ホロコーストとその後のイスラエルの建国によって、世界のユダヤ人社会の重心がアメリカとイスラエルに移動したため、第二次大戦前のヨーロッパのユダヤ人世界、とりわけ世界最大のユダヤ人集積地であったかつてのポーランド国家のユダヤ人世界の記憶が薄れつつある。本稿は現代のユダヤ人のアイデンティティを考えるうえで、この国家および第二次大戦前のポーランド共和国に存在したユダヤ人共同体の営みがいかに大きな意味を持っていたかを思い起こすきっかけとなることも目指している。
- 3) 本稿の叙述の大半を占める歴史的出来事の叙述は、以下に挙げる辞典、百科事典を参照した。これらはそれぞれユダヤ史研究において一定の評価を得ているものばかりだが、着目点や解釈について、様々な箇所而异同がないわけではない。だがここではこれまでの研究史において、おおよそ妥当とされている記述内容に沿うことを原則とし、特に必要な場合を除いて個別の歴史的的事象に関する叙述に注記はしない。 *Jüdisches Lexikon. Ein enzyklopädisches Handbuch des jüdischen Wissens in vier Bänden*. Berlin 1927; *Encyclopedia Judaica*. New York 1971-1972; *The YIVO Encyclopedia of Jews in Eastern Europe*. Vol. 1-2. New Haven & London 2008; *Neues Lexikon des Judentums*. Gütersloh-München 1992（ポーランド語訳： *Nowy leksykon judaistyczny*. Warszawa 2007. 日本語訳：『ユダヤ小百科』水声社、2012年）； *Polski słownik judaistyczny. Dzieje - kultura - religia - ludzie*. Tom 1-2. Warszawa 2003.
- 4) 16世紀に人头税徴収業務に関連して設置されたポーランド国家のユダヤ人の全国組織。詳しくは次章の記述、および拙稿「分割前ポーランドにおけるユダヤ人の自治——全国会議 Waad Arba Aracot の構造と機能——」『東京国際大学経済学論叢』第20号（1999年3月）を参照。
- 5) サバタイ・ツヴィについては、ゲルシヨム・ショーレム『サバタイ・ツヴィ伝——神秘のメシア』（石丸昭二訳）法政大学出版局、2009年を参照。
- 6) Statut kaliski. ヴィエルコポルスカ（Wielkopolska）公ボレスワフ・ポボジヌイ（Bolesław Pobożny）によってポーランドのユダヤ人に初めて与えられた特権で、後の様々な特権の原型をなす。カリシュ特権の形成への過程、その影響については拙稿「ポーランド・ユダヤ人の「一般特権」について」『東京国際大学経済学論叢』第33号（2005年9月）を参照。
- 7) ラビ（rabi, rabbi）という名でよく文献に登場するが、その場合上述のラフと混用されることが多く、歴史的に多義的である。ここではポーランド語で共同体の公的な指導者としてラビンと記述するケースが多いので、それを踏襲する（ドイツ語では Rabbiner）。このラビンを議長とする統治組織がラビナート（rabinat）である。この間の事情については、 *Rav, Rabbi, Rebbe. Rabbis in Poland*. Warszawa 2012 を参照。
- 8) 正統派という名称は、後の時代に新たに発生した他の潮流と区別するために使われた歴史的用語であって、本稿が扱う18世紀頃で使用されていたわけではない。現在では明確に意味付けられて、正式名称となっている。
- 9) この時期についてはサバタイ派、フランク支持者の区別は意味がないので、しばらくはサバタイ派あるいはサバタイストと表記する。
- 10) 唯一「タルムードはユダヤ人はキリスト（教徒）の血を必要とすると教えている、したがってタルムードを信ずる者はその使用を義務づけられている」という点のみ、裁定がヴァチカンに委ねられたとある。 *zob. Polski słownik judaistyczny*.

- 11) 1655-1660年のスウェーデンとの戦争 (Potop szwecki) の折り、ヤスナ・グーラ修道院の攻防戦がスウェーデン軍の侵攻を食い止め反攻の契機となったことから、その修道院のシンボルであるマリア像への崇拝が生じ、後に国家ひいては民族を救うものとして信仰の対象となり、現在も続いている。
- 12) フランクの思考には、イベリア半島の改宗ユダヤ人マラーノとの心的類縁性を見ることが出来るかもしれない。
- 13) メンデルスゾーンはフランクがオッフェンバハに移った年に死去しているため、両者が直接個人的につながりを持った形跡はない。
- 14) Vgl. Davidowicz Klaus S., *Zwischen Prophetie und Häresie. Jakob Franks Leben und Lehren*, Wien-Köln-Weimar 2004.
- 15) ハシディズムの諸集団の長。単に後述の宗家 (dynastia) の指導者としてではなく、信者からは神に近い存在、神の言葉を伝える預言者的な存在として崇拝された。ハシドの間では、レベ (rebbe) という名で呼ばれた。
- 16) オーストリア領となったガリツィアでは、1789年の寛容令で同様のことが認められた。プロイセン領では、改革派という新たなユダイズムの発生と関連し、他の分割領とは異なる経過を辿った。